

「藤江渡し」をしのぶ！

カオーイリと呼ばば戻ってきた
吉浜と東浦町を結ぶ渡し舟
廃止されて半世紀、思い出を後世へ

この文章は、昭和55年1月発行の中部新報の記者に小見出しを付けたまま転記した。

衣浦大橋が完成するまで、吉浜と対岸の東浦町藤江を結ぶ渡船があった。通称、「藤江の渡し」または「藤江越し」と呼ばれ、いったん出航したあとでもカオーイリと声をかければ戻ってくれ、というのんびりした渡船だったが、人の往来や生活物資の交流に大きな役割を果たしていた。廃止されたのは昭和三十一年。それから二十四年が経過した吉浜で、この懐かしい渡船の記念碑を建てようという話を持ち上がった。その後「藤江渡し記念碑建立会」（杉浦節治会長）も発足。昭和五十五年完成・除幕式が行われた。

話が持ちあがったのは昭和五十四年九月。吉浜公民館では活動の一環として、「吉浜公民館便り」を発行しているが、その編集会議のよもやま話から発案された。

江戸時代から交通の大動脈
東京や京都へ行くにも利用

今では、川渡しを知る人は少なくなつたが、衣浦大橋が開通するまで、高浜から知多半島へ渡る三つの渡船があった。田戸の渡し（現在の高浜町崎公園付近―亀崎）、森前の渡し（衣浦大橋付近―亀崎）、藤江の渡し（吉浜町芳川地先―東浦町藤江）が、それぞれ三河と尾張を結ぶ重要な交通機関として大きな役割を果たしていた。

藤江の渡しは、いつごろ開設されたかを知る資料はないが、言い伝えによれば江戸時代からとされ、武豊線が開通した明治十九年以降は、東

京や京都へ行くにも「藤江の渡し」を利用して、緒川駅から武豊線を経由して東海道線に乗ったという。三河と尾張を往復し、生活物資も人情も渡す

大正に入つて刈谷と大浜を結ぶ三河線が開通してからも、知多半島の織機工場へ勤める娘さんや、野菜、文具、呉服、魚を運ぶ商人で賑わいを見せ、時には自転車や大八車も乗せて、約500メートルの衣浦湾を往復していた。

る舟で、波が荒ければ欠航、対岸に客が見えたら出航、いったん出航したあとでも、カオーイリと呼ばば戻ってきて乗せてくれるというのんびりした渡船だったが、昭和三十一年、他の二つの渡船とともに廃止された。

こころに残る
ふるさとの歴史を後世に

この昔懐かしい藤江渡しの思い出を後世に残そうと、若いころ渡船に乗った経験をもつ吉浜町の有志が発起人となつて「藤江渡し記念碑建立会」が発足。記念碑建設に向けて募金活動を始めた。

計画では、吉浜町芳川地内の渡船場跡に、「藤江渡し跡」と刻んだ高さ三メートルの碑を建てる。当時の建設費は50万円。多くの幼友達や渡船を利用したという婦人からの寄付が寄せられ、建立会の杉浦会長らも切れない思い出。記念碑を建て後世に伝えたい」と思う願いが通じた。

「藤江渡し」の当時の賑わいと
船頭さんたちの暮らしとエピソード

〈常連の客〉

- ◇八百屋さんは大八車で、毎朝、吉浜の青果市場へ仕入れにきた。
- ◇織り姫様（織機女工）休日毎に大挙して往復し、舟に花が咲いた様。
- ◇土人形売りが毎年雛節句が近づく和有脇、乙川から人形を入れたビクを担っておばさんが、この三河路へ春と一緒に渡ってきた。
- ◇メグナ売りのおばさん、呉服屋、菓売りのおじちゃんもよく渡った。

〈縁日〉

縁日は殊の外お客が多く、緒川の乾神院、西端の蓮如さん、棚尾の毘沙門さんには終日越し場は賑わった。特に、昭和三年と昭和九年の吉浜のお開帳の折の細工人形展には一カ月に及び、越し場は延々長蛇の列。満員客で舟は危険を伴うくらいで、船頭さんは全神経を消耗したとか・・・。

そのおかげで夕暮れには船賃が一荷のビクに満載となり、天秤棒で担って家路につき、一家でお金を数えたそうなの・・・。

〈人情話〉

夕闇せまる越し場に、ススキをかき分けて一人の娘さんが慌しく駆けつけた。「無一文ですけれど、早く向こう岸まで渡して下さい。事情は船に乗ってから話します」という、とにかく娘を船に乗せてから話を聞くと、「いま郭から逃げ出してきた。まもなく追っ手がくる」との話。娘の悲願にほだされ、急いで藤江に渡した。その後いくばくもなくして女将が目の色かえて追ってきた。「今しがた、これこれの女がこなかったか？」と訊く。「知らぬ存ぜぬ」の一点張り。女将と掛け合いをし、虎口より逃がした話など、浪花節のような人情話が續出した。